

マルコ 8 : 31-9 : 1

「イエスと私たちの十字架への道」

8:31 それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。 8:32 しかも、はっきりとこの事がら話をされた。するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。 8:33 しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」 8:34 それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。 8:35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。 8:36 人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。 8:37 自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。 8:38 このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。」 9:1 イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまでは、決して死を味わわない者がいます。」

導入

マルコの福音書の学びも後半に入りました。

前半は 8 : 29 までで、先月にその学びを終えました。

そこには、ペテロの信仰告白がありました。ペテロは、イエスが神の御子キリストだと告白しました。

マルコの福音書の後半では、イエスが神の御子であるという事実が焦点となっています。

そのクライマックスとして、マルコ 15 : 39 にある百人隊長の告白があります。

15:39 イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「この方はまことに神の子であった」と言った。

このテーマに加え、マルコは、後に起こるイエスの死と復活に重点を置きます。

これまでは、イエスは言葉や奇跡によってご自身がこの世のものとは違った国の王であられることを示してこられました。

しかし、人間の罪深い心に最終的にどう対処なさるのか、サタンをどう倒されるのかについてはまだ言及しておられませんでした。

ここまでのイエスの奇跡の数々は、最大の奇跡への序章です。

最大の奇跡とは、すべての信徒のために勝ち取られる究極の勝利です。それは、イエスの十字架上の死によって成し遂げられます。

この勝利によって、サタンの敗北が決定します。

今日の聖書箇所、マルコはイエスの死と復活について初めて語ります。

今日の学びは、3 つに分けてお話ししましょう。

- 8 : 31-33— イエスの死の必要性
- 8 : 34-38— 私たちの霊的死の必要性
- 9 : 1— ふたつの死の後にやってくる栄光

1. イエスの死の必要性 (8 : 31-33)

この箇所は、弟子たちに大きな衝撃を与えたことでしょう。

弟子たちにこの言葉を予想させるようなことは、イエスがこれまで語ってこられた内容にはありませんでした。

31 節で、イエスは多くの苦しみを受け、ユダヤの宗教指導者たちから拒絶されて殺されると弟子たちにおっしゃいました。

この言葉の中で唯一の祝福は、死んで三日後によみがえるとおっしゃった最後の一言です。

ペテロは取り乱して、そんなことを言ったイエスを叱りました。

すると、イエスはその言葉に対し、すべての弟子たちにおっしゃいました。
イエスの言葉をわかりやすく言い換えるなら、「私が退けられ、死んでよみがえることを避けようとするのは、サタンのやり方に従うことだ」というわけです。
つまり、サタンを倒すには、イエスが死ななければならないのです。
イエスの死がなければ、復活の栄光という未来はありません。
弟子たちをはじめ、当時の人々は、イエスが地上に来られた理由について誤解していました。
ペテロはイエスが神の御子であるという信仰を告白しましたが、イエスが地上に来られた本当の理由を理解していませんでした。
彼らは、イエスが神であられることは信じていましたが、地上での使命についてはわかっていなかったのです。
現在でも、イエスがなぜ天の栄光を離れてこの世に来なければならなかったのか、その重要性を多くのクリスチャンがしっかりと理解できていません。

ここで、イエスがなぜ十字架上で死ぬ必要があったのかを手短かに説明しましょう。

1. 神は最初の人アダムを完全で罪のない人としてお造りになりました。それは、神の友とならせるためです。神はアダムの創造主であり所有者でした。アダムは永遠に生きる存在として造られました。
神はアダムを美しい園に置かれました。そこで、彼はたったひとつの禁止事項を警告とともに与えられました。
それは、善悪の知識の木の実を食べてはいけないというものでした。神は、もしその言い付けに背けばアダムは死んでしまうと警告なさいました。
神はアダムの助け手として女を造られました。こうして、子どもが生まれることが可能となりました。
2. 残念ながら、神の御使いのひとりであったルシファー、サタン、悪魔とも呼ばれる者が園に入り、アダムの妻エバを誘惑しました。神のことばに背いて善悪の知識の木の実を食べるようにとそそのかしたのです。
後に、エバはアダムも同じく食べるように説得しました。
3. 神は約束を守られたので、アダムとエバは死ななければなりませんでした。その結果、私たち人間が地上で与えられた人生は短いもので、いつか必ず死にます。私たちも、裁きの一端を引き継いでいるのです。神のみことばである聖書が教えるとおります。

ローマ 5:12 そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。

また、地上にも呪いがかけられました。（創世記 3 : 17）

4. しかし、神はご自身の造られた人類を深く愛しておられたので、ご自身の神聖さを妥協することなく、人間の罪を赦して関係を修復する方法を見つけなければなりませんでした。
それを可能にする唯一の方法は、ご自身の御子イエス・キリストに私たちの罪の罰を負わせていけにえとすることです。
イエスは、十字架上で死なれたとき、イエスを信じる信仰を持つようになるすべての人の罪の罰をその身に受けられたのです。
5. ですから、イエスを信じ、イエスが私たちの罪のために死んでくださったことを信じるなら、誰でもサタンの力から解放されます。
もはやサタンに私たちの行く末を左右する力はありません。
つまり、サタンは敗北したということです。サタンから解放されるだけでなく、すべての信徒はいつの日か、完全な「新しい地」でよみがえりの体をいただき、新しい人生を生きることにあります。

神はすべてをやり直されます。違うのは、サタンが地獄と呼ばれる場所に縛られるということです。そこには、イエスを通して示された神の愛を拒絶した人々もサタンとともに閉じ込められます。

説教原稿には、今お話したことについて詳しく知るために重要となる聖書箇所をリストアップしています。

私がお話したことはすべて聖書に記されています。

これは私の考えではありません。神がみことばである聖書の中でおっしゃったことです。

重要な聖書箇所は次のとおりです。

創世記 2-3 章、ヨハネ 11 : 17-27、ヨハネ 14 : 1-6、ローマ 1 : 18-20、ローマ 3 : 9-26、ローマ 5 : 6-12、ローマ 6 : 15-23、黙示録 20 : 7-15、黙示録 21-22 章

2. 私たちの霊的死の必要性 (34-38 節)

34-38 節で、イエスは群衆と弟子たちに、私たちがどのように従うべきかについてイエスご自身の死の意味を説明されました。

イエスは 34 節で、クリスチャンの弟子訓練には、自らを否定することと十字架を負うことが含まれると明言しておられます。

これは、今日の私たちにはどういう意味があるでしょう。

まず、イエスの呼びかけはそこにいて聞いていた人々に向けられていたことを理解しなければなりません。では、イエスのことばを聞き手たちはどのように受け取ったのでしょうか。

イエスは直前にご自身の肉体の死について語られました。

そのことばに続いて、自分の十字架を負うと言えば、聞き手たちは、イエスとともに死のうという招きだと理解したでしょう。

ですから当時の人々にとって、イエスに従うためには、イエスと福音のために命を捨てる覚悟が必要だという意味になります。

イエスについていくためにどんな犠牲もいとわず身を投じることだと受け止めたはずで

イエスは続いて 35-37 節で、弟子となることへの過激な招きに含まれる霊的な意味を説明されます。35 節で、十字架を避けて自分の道を行けば、結局は自分の命を失うことになるとおっしゃいました。

つまり、後にやってくるよみがえりの人生に与れないということです。

35 節の後半は、自らを犠牲にしてイエスに従えばどうなるかが記されています。

最終的には、永遠に至る命を得、イエスに従う人々に約束されたよみがえりの命をいただくのです。

36 節で、イエスはたましいの価値について言及なさいます。

イエスは、この世のすべてを手に入れられても、それは一時であり、最終的にはたましいがこの世の何よりも尊いとおっしゃいました。たましいは永遠のものだからです。

私たちのたましいは、未来にやってくる新しい地でよみがえりの体で生きるか、永遠に地獄で罰せられるかのどちらかです。

聖書は、一旦地獄に行ってしまったら天国にたましいが移動するやり直しのチャンスはないと教えます。

イエスは、たとえを使ってこの真理を教えられました。

ルカ 16 : 19-26

16:19 ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。 16:20 ところが、その門前にラザロという全身おどきの貧しい人が寝ていて、 16:21 金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおどきをなめていた。 16:22 さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。 16:23 その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。 16:24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』 16:25 アブラハムは言った。

『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きていた間、良い物を受け、ラザロは生きていた間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。』

16:26 そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることができないのです。』

38 節には、イエスからの最後の警告が記されています。

イエスとイエスの言葉を私たちが恥ずかしく思うなら、つまり、イエスの十字架とその犠牲を恥じるなら、イエスが後に栄光を帯びて戻ってこられるときに私たちが拒まれます。

イエスとともに生きる栄光のいのちに将来与りたいなら、イエスが十字架上で私たちのために死んでくださった御業を信じるだけでなく、イエスに従うために何でもする覚悟が必要だということです。

過去 2000 年以上、多くのクリスチャンにとって、イエスに従うことは命を失うことでした。

過去約 60 年間、多くの日本人クリスチャンにとっては、家に伝わる神道や仏教のしきたりや慣習を破ることでした。家族を喜ばすために神社仏閣に行くのをやめなければなりません。これは彼らが払った犠牲です。

また、家の仏壇を取り外さなければなりません。

これからお正月が近づきます。

日本人クリスチャンにとって、家族を喜ばすためであっても神社仏閣に行かないことが大きな課題です。

神社仏閣に行くことで、実際には家族を喜ばす結果にはなっていません。家族がイエスを信じるのをもっとむずかしくしているだけです。

もし私たちがイエスのために犠牲を払う覚悟があると家族が分かれば、イエスが大切な存在であることを家族は知るでしょう。

妥協すればよいという悪魔のうそを信じてはいけません。悪魔は常に、楽な道へと誘いますが、それは妥協の道です。

妥協の道は、神に祝福された生き方ではありません。

3. ふたつの死（イエスの死と私たちの死）の後にやってくる栄光（9：1）

9：1 で、イエスは弟子たちに約束を与えておられます。

この個所を改めて読みましょう。

9:1 イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまでは、決して死を味わわない者がいます。」

ここでイエスは、弟子たちが死後に与えられる栄光のいのちを確信できるように、一種の個人的体験を約束なさいます。

6 日後、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れて、山に登られ、そこで彼らはイエスが約束なさったことを体験しました。

来月も引き続き、マルコの福音書を学びます。そのとき、「山上の変貌」と呼ばれる個所を学びます。

では、これから聖餐式に与ります。

聖餐式は、感謝をささげる礼拝です。聖餐式に与る者すべては、イエスが私たちの罪のために十字架上で死んでくださったことに感謝をささげます。

あなたがクリスチャンで、イエスに罪の赦しを既に求めているなら、ぜひ聖餐式にご参加ください。

まだクリスチャンでない方は、お座りになったままで、パンとグレープジュースが回ってきたら取らずに次の方へお渡しください。

聖餐式に参加されないことで、気分を害する人はいませんのでご安心ください。

では祈りましょう。